



Title	「溝壑を填む」ということ : 文天祥を中心に
Author(s)	村田, 真由
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2021, 3, p. 42-45
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/79345">https://doi.org/10.18910/79345</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 「溝壑を填む」ということ 一文天祥を中心に

中国文学 博士前期課程1年

村田 真由

## 一. はじめに

『孟子』巻六・滕文公章句下に、「志士不忘在溝壑，勇士不忘喪其元。（志士は溝壑に在るを忘れず、勇士は其の元を喪うを忘れず）」とある。「溝壑に在り」に類する言い方には「溝壑を填む」などがある。以下、「溝壑」と略す。

「溝壑」とは、志士は義のためならば窮死して屍を溝や谷に棄てられてもよいと覚悟しておかなければならないという「生を捨てて義を取る」（『孟子』告子上）理念を示したものである。人は誰しも死に対しては恐怖を抱くものだが、近代以前には、忠義の念はその恐怖をも克服することができるとされた。この理念は近代に至るまで東アジアに広く受け継がれ、少なからぬ影響を与えてきた。我が国においては、吉田松陰（一八三〇-五九）が獄中において『講孟箴記』にこの言葉を引き、「溝壑をさへ忘れざれば、生を囹圄に終るとて、少しも頓着はあるまじ」と述べている。

本報告は、南宋の文天祥（一二三六-八三）の文学において、この「溝壑」という理念がいかにして継承され、表現されているか、またそこにはどのような特徴があるかについて、検討するものである。

## 二. 「溝壑」と文天祥

歴史書において、「溝壑」を恐れない積極的な姿勢は、基本的には忠臣のあるべき姿として記述されてきた。例えば、『漢書』趙充國伝には「臣得蒙天子厚恩，父子俱為顯列。臣位至上卿，爵為列侯，犬馬之齒七十六，為明詔填溝壑，死骨不朽，亡所顧念。（わたくしは天子の厚い恩を受け、父子共に臣下として重用していただきました。わたくしの位は上卿に至り、爵は列侯となりました。いま齢七十六になり、天子の詔勅で溝壑を填めることになったならば、死しても骨は朽ちず、心残りはありません）」とある。

しかしながら一方で、『三国志』魏書・陳思王伝には「常恐先朝露，填溝壑，墳土未乾，而身名並滅。（朝の露に先んじて、溝か谷に埋められ、墳墓の土がまだ乾かぬうちに、身も名もともに消滅することをつねに心配しております）」とある。ここで述べられているのは、「溝壑」の結果として、自らの名も遺骸も朽ちて後世に伝わらないことへの恐れである。つまり「溝壑」には、単に『孟子』における忠義の理念を示す場合だけでなく、人間誰しもが抱く死への恐怖を象徴する側面もあるのである。

このような揺らぎを持ちながら脈々と受け継がれてきた「溝壑」を考えるうえで、実際に「溝壑を填む」危機に瀕した人物として注目されるのが、文天祥である。文天祥は南宋王朝の宰相として敵国モンゴルとの戦争に身を投じたが、囚われて約三年を牢獄で過ごしたのちに処刑された。彼はこの間に自らの屍が「溝壑を填む」ことについて繰り返し詩にうたっている。その数は他に例を見ないほどであり、「溝壑」について考えるうえで、極めて興味

深い人物であるといえる。

文天祥は死後、忠烈の士として尊崇の対象となってきた。だが、後世偶像化された文天祥像は、必ずしも生身の人間としての彼の姿と一致するとは限らない。本報告では、「溝壑」をめぐる文天祥自身の言葉を手掛かりに、『孟子』に説かれた理念と、現実直面した死の恐怖との狭間で、彼が何を考え、どのように苦悩したのかを考察することで、ややもすれば偶像化の背後で覆い隠されてきた、彼の人間像の一端を明らかにしたい。

### 三. 「溝壑」に対する姿勢の変化

文天祥は恭帝徳祐二年（一二七六）一月、元軍との交渉に赴くが失敗し、抑留される。この危機的状況に際し、彼は友人に宛てた詩で「溝壑」について初めて言及する。

魯連子兮義不帝秦      魯連子 義にして秦を帝とせず  
負玄德兮羽不名爲人      玄德（劉備）を負い 羽（関羽）名をなさずして人が爲にす  
委骨草莽兮時迺天命      骨を草莽に委つるは 時れ迺ち天命なり  
自古孰無死兮首丘爲正      古自り孰か死無からん 首丘 正しきを爲さん

〈思小村（劉）〉（『文山集』卷十三・恭帝徳祐二年（一二七六）二月下旬の作。）

ここでは「骨を草むらに捨てられること」すなわち「溝壑」は天命であるとし、たとえ溝壑を填むような事態になったとしても、正しく首を故郷に向けて死のうと宣言する。

「溝壑」を恐れない姿勢は、次の詩にも示されている。

自古皆有死 古自り 皆死有り  
義不汚腥羶 義 腥羶（異民族）に汚されず  
求仁而得仁 仁を求めて仁を得れば  
寧怨溝壑填 寧ぞ怨まん 溝壑を填むを

〈高沙道中〉（卷十三・恭帝徳祐二年（一二七六）三月初六七日の作。）

この詩は、元軍からの逃避行の道中に襲撃に遭ったことについて記したものである。義は汚れることはないとし、仁を求めた結果としての「溝壑」ならば、恨みはしないとうたう。これら二首は、いずれも南宋王朝の存続中に書かれたものであり、文天祥は自らの生命よりも義を全うすることを重視する姿勢、「溝壑」に対する積極的な態度を示しているといえる。

ところが南宋王朝の滅亡後、獄中に囚われてからは次のような詩が書かれるようになる。

初憐骨肉鍾奇禍      初め 骨肉に奇禍の鍾りしを憐れむも  
而今骨肉相憐我      而今 骨肉 我を相い憐れむ  
汝在北兮嬰我懷      汝 北に在り 我が懷に嬰る  
我死誰當收我骸      我死せば 誰か當に我が骸を収むべき

……（中略）……

嗚呼六歌兮勿復道      嗚呼六歌 復た道うこと勿れ  
出門一笑天地老      門を出でて一笑すれば 天地も老ゆ

〈六歌（其六）〉（卷十四・元世祖至元十六年（一二七九）九月中旬、獄中の作。）

詩には「私が死んだときには、いったい誰が骨を拾ってくれるのだろうか」とあり、家族離散の悲劇をから翻って、自分自身の「帰骨」が叶わないことに対する恐れが示されている。

さらに次の詩では、厳しく耐えがたい獄中の寒さをうたったうえで「私が死んだら早く故

郷の墓に骨を返して、首だけ故郷に向けて死ぬという恥をなさないようにしたい」とし、先祖の墓に入りたいという思いを明確に述べる。

撲面風沙驚我在 面を撲つ風沙 我を驚かして在り  
滿襟霜露痛誰堪 襟に滿つ霜露 痛くして誰か堪えん  
何當歸骨先人墓 何ぞ當に 先人の墓に骨を歸して  
千古不爲丘首慚 千古 丘首の慚を爲さざるべし

〈寒食〉(卷十四・世祖至元十八年(一二八一)三月寒食の日の作。)

ここでは「丘首」を恥ずべきものと捉えており、前掲〈思小村〉における捉え方とは大きく異なる。これらの詩は、「溝壑」に対する積極的な姿勢とは相反するものである。つまり、文天祥の「溝壑」に対する意識は、南宋王朝の滅亡前後で少なからず変化したといえる。

#### 四. 王朝滅亡前後での変化の要因

このような変化の要因としては何が考えられるだろうか。忠を尽くすべき対象である南宋王朝が失われたことが、要因の一つであることは言うまでもないが、これに加えて、大きく二つの要因が指摘できる。一つには戦場での実体験であり、もう一つには孝の問題である。

まず第一に、戦死者の屍が戦場に捨て置かれる光景を目にした経験が挙げられる。例えば〈至高沙〉(卷十三)においては、序に「使果不免委骨草莽，誰復知之？(使し果たして骨を草莽に委てらるを免れざれば，誰か復た之を知らん?)」とあり、詩に「若使兩遭豺虎手，而今玉也有誰埋。(若使 兩つながら豺虎の手に遭わば、而今 玉も也た誰か埋むる有らん)」とある。ここでの「玉」とは文天祥自身を指しているとも考えられる。英傑であるはず自分も「溝壑」の事態にあえば、散乱する名もなき死体の一つとして、誰にも知られないまま放置される可能性があることを痛感するのである。また〈發高沙(其二)〉(卷十三)には「城子河邊委亂尸，河陰血肉更稀微。(城子の河邊 亂尸委てらる、河陰の血肉 更に稀微たり)」とある。このような描写は、文天祥が戦場で死体が散乱する様子を目の当たりにして、現実問題としての「溝壑」の悲惨さに強い衝撃を受け、恐怖を抱いたことを物語っている。

また、戦場において友人の「帰骨」を叶えることができないという問題に遭遇した経験も挙げられるだろう。例えば〈哭金路分應(其二)〉(卷十三)の序には「邊城無主恐貽身後之禍，異時遇便，取其骨歸葬廬陵，而後死者之目可閉也。傷哉，傷哉！(邊城に主無く、身後の禍を貽すを恐る，異時 遇 便あれば，其骨を取りて廬陵に歸葬せん，而る後に死者の目、閉じる可き也。傷ましき哉，傷ましき哉!)」とあり、死者は故郷に骨を帰してもらって初めて安らかに眠れるのだとする。文天祥は友人の「帰骨」の問題を経験したことで、同時に自身の「帰骨」に対する思いも深めたのではないか。実際、獄中の〈感懷二首(其一)〉(卷十四)には、「一死一生情義重，莫嫌收拾老牛屍(一死一生 情義重し、嫌う莫かれ 老牛の屍を收拾するを)」とあり、「どうか私の屍を取めることを厭わないでおくれ」と訴える。

さらに第二の要因としては、現実的に「溝壑」の状況に陥った場合に生じる「孝」の問題がある。獄中で母の二回忌に際して書かれた〈哭母大祥〉(卷十五)においては、「古來全忠不全孝(古來 全忠は全孝ならず)」と述べ、忠と孝を両立するという理想を自ら否定したうえで、「不知何日歸兄骨，狐死猶應正首丘。(知らず 兄の骨を歸すること何れの日なるやを、狐死して猶お應に首を丘に正しくすべし)」と述べる。序には「某爲子不孝，南望嗚咽，

爲哀章一首。(某は子と爲りて孝ならず、南を望みて嗚咽し、哀章一首を爲す)」とあるが、ここでの不孝とは、「溝壑」の実践の結果として、死後に「帰骨」して故郷の親の墓に入ることができないことをいう。孝はしばしば忠との間に軋轢を生ずるものであるが、「溝壑」の場合においても、「溝壑」の忠を實踐することと、「帰骨」の孝とを両立させることは不可能である。「帰骨」についての懸念は、前掲〈六歌〉や〈寒食〉にも示されていたが、この葛藤のなかで、文天祥は「溝壑」に対する姿勢を変化させた、少なくとも「溝壑」への決意を述べるのに躊躇せざるを得なくなっていたといえるのではないか。

## 五. 「溝壑」を笑う

以上、文天祥における「溝壑」に対する姿勢の揺らぎについて述べてきた。前節に挙げたような側面のみに焦点を当てると、文天祥は「溝壑」に直接対峙することを避け、目を背けているかのように思われるかもしれない。だが、果たしてそうだろうか。ここではさらに、南宋王朝滅亡後の文天祥の「溝壑」に対する注目すべき姿勢の変化について述べておこう。

例えば〈正氣歌〉(巻十四)には「分作溝中瘠(分として作さん 溝中の瘠)」とある。これだけを見れば、文天祥は『孟子』以来一般化した、自らの信ずる理念のためなら命をも投げ出すという積極的な「溝壑」の姿勢を再び取り戻したかに思われる。しかしながら、この直後に書かれた〈覽鏡見鬚髯消落爲之流涕〉(巻十四)では、「向來事業竟徒勞、青山是我安魂處。(向來の事業 竟に徒勞なり、青山 是れ我が魂を安んずるの處)」とうたう。ここでは忠を尽くしたはずの自分の人生を、結局のところ徒勞であったと否定したうえで、世の中、骨を埋める場所などどこにでもある、と述べるのである。これは明らかに、北宋の蘇軾が獄中で死を覚悟して述べた言葉「是処青山可埋骨(是る処の青山 骨を埋む可し)」、幕末の僧、釈月性の「人間到る処青山あり」に通ずるものである。ここには、忠や孝といった道徳観念を超えた、人間の死に対する一種の達観が表れているのではないだろうか。

文天祥の「溝壑」に対する達観に関連して、特に注目すべきは、次の〈讀杜詩〉(巻十四)である。この詩において、文天祥は「黄土一丘隨處是、故郷歸骨任蹉跎。(黄土一丘 處に隨いて是なり、故郷に歸骨するは蹉跎に任せん)」と述べる。これも一見すれば積極的な「溝壑」の姿勢を示しているかのように思われるかもしれない。しかしながら、これは『孟子』の理念に則ったステレオタイプとしての「溝壑」というよりは、「人間到る処青山あり」という、自らの死に対する開き直りを表したものと理解すべきだろう。

先ほど挙げた詩は〈讀杜詩〉、つまり杜甫の詩を読んだことに感慨を得て書かれた詩である。文天祥は杜甫の詩句を集めた『集杜詩』二百首を作るほど、杜甫に傾倒していた。その他ならぬ杜甫は、〈狂夫〉と題する詩において「欲填溝壑唯疎放、自笑狂夫老更狂。(溝壑を埋めんと欲するも唯だ疎放なりて、自ら笑う 狂夫老いて更に狂なるを)」という自嘲の詩句を書き記している。ここに表れているのは、死への恐怖を笑い飛ばすかのような、通常の枠組みを超えた「溝壑」に対する捉え方である。杜甫が自らの境遇を「笑」ったように、文天祥もまた、獄中の詩においては「一笑」という語を繰り返し用い、自らの境遇を笑い飛ばしている。前掲〈六歌〉でも「溝壑」についてうたうなか「出門一笑天地老(門を出でて一笑すれば天地も老ゆ)」の句が見える。文天祥は自らの特異な境遇のなかで、死を深く見つめることで、「溝壑」の恐怖を超え、それを「一笑」するような境地に至ったのである。